九十六　花誘ふ　嵐の庭の　雪ならで　ふりゆくものは　我が身なりけり

藤原公経



桜

〈声に出してよんでみよう〉

ハナサソー　アラシノニワノ　ユキナラデ　フリユクモノワ　ワガミナリケリ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊「オ段の音＋う／ふ」は、「オー」とよみます。現代語でも、「おう（王）」を「オー」、「さとう（砂糖・佐藤）」を「サトー」とよみますね。これは、歴史的かなづかいの跡が現代かなづかいにも残されている例の一つです。

〈どんな意味だろう〉

桜の花を誘って散らせる嵐が吹く庭は、花の雪が降り行くのではなくて、古り行く（古くなって行く・年老いて行く）ものは、私の身なのだなあ！

＊「・・ならで」は、・・ではなくて、という意味です。また、文末の「なりけり」は、「・・・なのだなあ！」という発見・気づき、詠嘆・感動を表します。

＊「**ふりゆく**」には、「（雪が）**降り行く**」と「（人が）**古り行く**（年老いて行く）」という二つの意味が込められています。このように、同音であることを利用して一つの表現に複数の意味を持たせる和歌の修辞技巧を「**掛詞**」と言います。掛詞には、三十一音という限られた形式の中に、重層的な意味を持たせる効果があります。

〈解説〉

現代語にも、「桜吹雪」という言葉がありますね。桜の花びらが舞い散る様子を雪にたとえるのは、古典の時代からよく用いられた技巧です。また、桜の花が散るさまに、自分の身が年老いるさまを重ね合わせて嘆くという発想は、小野小町の「九十九花の色は」の歌に似ています。小野小町は、絶世の美女でしたが、晩年は薄幸であったと伝えられています。一方、この「九十六花誘ふ」の歌の作者である藤原公経は、大きな富と権力を握った政治家です。対照的な二人ですが、季節の移り変わりに伴う人生の感慨は、対等に訪れるようですね。


桜


お金

〈作者と出典〉

**藤原公経**（一一七一―一二四四）は、鎌倉時代前期の京都の公家[2]です。公経は、このころ政治の実権を握っていた鎌倉幕府[3]と親しく、出世しました。一二二四年、京都の北山に西園寺という寺と山荘を建てましたが、「百人一首」をまとめた藤原定家は日記の中で、その豪勢さを批判しています。西園寺のあった場所には、現在、鹿苑寺（通称・**金閣寺**）があります。なお、定家の妻は公経の姉です。公経のこの「九十六　花誘ふ」の歌の出典は、九番目の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である「新勅撰和歌集」です。

---

1 ハ行の子音は、八世紀頃[p]から[ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて十一世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の[ɸ]が[w]と発音されるようになりました。なお、[ɸ]が[h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、十七世紀頃と推定されています。

2 「武家」に対する語で、朝廷に仕える貴族という意味です。

3 武家による政府を「幕府」、そのトップの人物を「将軍」と言います。